「三言」所収恋愛・婚姻小説とその文言原作との比較
――宿縁思想から「三言」の編纂意図を考察する

林　卓穎

はじめに

馮夢龍（1574―1645）によって編纂された「三言」（『古今小説』＝『喩世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』という三つの短編白話小説集の総称）は、計百二十編の小説が収められ、中国古代文学史上最も優れた短編白話小説集として広く知られている。これらの小説の中には、馮夢龍を含む明代の文人により独自に創作されたと思われるものも存在するが、前代から伝わる文言小説や史料、戯曲及び旧話本[1]などを利用し、改作してできた小説のほうが圧倒的に多いとされている。清末の俞樾以来今日まで、多くの研究者の努力によって数多くの作品の本事源流や制作時代などがすでに明らかにされてきた[2]。そのため、「三言」所収小説とそれらの先行する文言作品との比較研究も可能になった。

「三言」の中で、恋愛・婚姻に関する作品はかなり大きな比重を占める。その中でも、結婚を宿縁とする意識が明確に認められるケースが非常に多く見られることは、複数の研究者によって既に明らかにされている[3]。本論は、そういった作品の幾つかを取り上げ、それらを先行する文言作品と詳しく比較し、改作によって作品の趣旨や思想などに生じた変化を検討する。さらにその結果をもとに、「三言」の編纂意図についても考察を加えたい。

『醒世恒言』巻二十八「呉衙内鄰舟赴約」（以下「醒二十八」と略す。）の入話と正文には、それぞれ若い男女二組の大胆な恋愛の話が書かれている。

南宋の時、江州の秀才潘遇が会試の受験のために臨安へ赴く前夜、その父の潘朗は、息子が状元に及第する夢を見た。翌日、臨安に着いた潘遇は泊まるところを探しているうちに、ある宿についた。その宿の主人も前夜夢で土地神から、未来の状元である潘遇が自分の宿に泊まることを知らされていたのだった。そこに泊まった潘遇は、まもなく宿の娘と恋に落ち、ひそかに情を通じた。その後潘遇は、良心がとがめるようなことをやったため、天帝により状元になる運命を変更されてしまったという夢を見た。果たして彼は落第し、宿の娘とも一緒になれなかった。結局、彼は及第できずに鬱々と一生を終えた。（以上入話）

北宋の神宗の時、汴京の呉彦は揚州に赴任する父呉度とともに旅をしている途中、狂風に遭い、船は江州に泊まった。その隣りには、やはり狂風を避けて泊まっていた荊州に赴任する賀章の船があった。呉度と賀章は以前付き合いがあったため、船が出発できるまでの間、お互いの船を訪ねあっていた。その間に呉彦と賀章の娘の秀娥は相愛の仲になった。秀娥の船室で密会中、狂風が止んだため、二つの船はそれぞれの方向へ出発した。呉彦はやむなく秀娥の船室に身を隠しながら日を送るが、やはりばれてしまった。賀章は呉彦を殺そうとしたが、妻に説得され、二人の仲を認め、結婚させることにした。呉彦は婚約ののち進士に及第し、秀娥と結婚した。さらに、呉彦は龍図大学士に出世し、その二人の息子も科挙に及第した。（以上正文）

以上の二つのストーリーを対照してみると、共通する要素が多く見つかる。

1　男性は、文学の才能も容貌も優れた若い読書人。まだ科挙にも及第しておらず、結婚もしていない。

2　女性は、若く未婚の美貌の持ち主。

3　二人は知り合った後まもなく相愛の仲になり、しかもすぐひそかに情を通じる。

このような共通点にもかかわらず、二組の恋人は全く正反対の結果をむかえてしまう。

入話の潘遇は、そもそもは状元になる運命であったのに結局落第してしまい、そのまま終生及第することはなかった。それに対し、正文の呉彦は進士に及第し、荊州府湘潭県尹を授けられ、のちにはさらに龍図大学士にまで至った。

恋の結果について見ると、入話では、数年後、潘遇は宿の娘が既に別人に嫁いだことを知り、悔やんでやまなかったとある。正文のほうでは、二人は結婚して二人の息子にめぐまれ、幸せな生活を送るというハッピーエンドになっている。

一つの作品の中で、明らかに同じ展開を持つ二つの恋物語が、なぜ正反対の結末へ向かうように設定されたのか。読者はきっと疑問を抱くに違いない。それに対する作者の答は既に作品の中に用意されている。入話の終りに、作者（語り手）自ら疑問を発し、それに答える言葉がある。

「説話的、依你説、古來才子佳人、往往私諧歡好、後來夫榮妻貴、反成美談。天公大算盤、如何又差錯了？看官有所不知。大凡行奸賣俏、壞人終身名節、其過非小。若是五百年前合為夫婦、月下老赤繩系足、不論幽期明配、總是前緣判定、不虧行止。」（「講釈師、あなたの話だと、古来才子佳人は往々にしてひそかに情を通じるものの、のちに夫婦ともに栄華と富貴を得、却って美談になる。（この話の場合では）天帝の計算はどのように間違ったのだろうか。」「お客さんはご存知ありませんか。おおよそ奸を行い媚を売り、人の一生の名節を損ねるその過ちは決して小さくは

ありません。もし五百年前に夫婦になる定めがあり、月下老人に赤い糸で足を結ばれているのであれば、幽期か明配かを問わず、必ず前縁によって判定されるもので、品行を虧くことにはならないのです。」）

「才子佳人」の恋愛に対する作者の見方及び立場に関し、二つの点が明らかに読みとれる。ひとつは、「才子佳人」がひそかに情を通じること（「私諧歡好」）は、「才子」のほうが不正な行為を行ったり媚を売ったりする（「行奸賣俏」）のが誘因であり、結果として「佳人」の一生の名節を損ねてしまい、「才子」の誤りは軽くはないということ（傍線部）。入話のストーリーには、こういった見方がきちんと反映されているのである。もっとも潘遇と宿の娘との間では、宿の娘も潘遇に比べて遜色ないほど主動的であるようにも見えるので、潘遇に「行奸賣俏」という罪を与えてもよいのかとも感じられる。しかし、この話の中では、すべて潘遇が悪いとされ、彼のみが懲罰を受けている。宿の娘は別人と結婚したとあるのみで、不幸に遇ったかどうかはいささかも言及がないのに対し、潘遇は一生及第できず、鬱々と生涯を終えるという甚だしい懲罰を受けたのである。とはいえ、「佳人」との「私諧歡好」は必ずしも「才子」に懲罰をもたらすとも限らない。懲罰を避けるには一つの資格が必要である。それは、恋愛する双方にそもそも結婚する縁があり、月下老人に赤い糸で足を結ばれているということである。この条件さえ満たせば、「幽期」（ひそかに婚約をするタイプ）か「明配」（父母の命、媒酌の言によるタイプ）かは一切問わず、不正な行為とも見なされなければ、罰も受けないのである（二重傍線部）。この点を正文のストーリーに照らし合わせてみると、たしかに罰されないばかりか、むしろ情を通じることを勧めているようにすら見える。呉彦は潘遇と同様、一人の女性の名節を損ねる行為をしたにも関わらず、最後は進士に及第して官途を順調に進むばかりか、一族もこれ以上ないほど円満になり、さらに息子二人もそろって出世した。入話の結末と比べて、まさに天と地の違いと言えるだろう。驚くべきは、これほど甚だしく異なる結末が、ほかならぬ「縁」の有無だけによって導かれていることである。

「前縁・天縁」によって夫婦が結ばれるという意識を表す言葉は「三言」のほかの作品の中にも多く見られる。例えば、

「姻縁本是前生定、曾向蟠桃會裡來」（婚姻の縁はそもそも前世に定まったもの、前世に蟠桃會で出会い、今生で夫婦になる）（「警（『警世通言』の略。以下同じ）二十三・楽小舎」）

「夫妻不是今生定、五百年前結下因」（夫婦になる運命は今生では決まらない、五百年前に結んだ縁である）（「醒（『醒世恒言』の略。以下同じ）九・陳多寿」）

「自古姻縁皆分定、紅絲豈是有心牽」（古より、婚姻の縁は定まっている、赤い糸は人間の意志で結びつけることができようか）（「醒七・錢秀才」）

「姻縁自古皆前定、堪笑狂夫妄用機」（婚姻の縁はみな前世に定まったものであり、しれ者がむだに計略をめぐらすことは物笑いの種になる）（「醒三十二・黄秀才」）

などがあり、男女が結ばれるには、「縁」が不可欠だという思想を再三読者に説いている。「醒二十八」正文の呉衙内らは、前二つの対句が説く宿縁のあるケースに当たり、後二つの対句は入話のようなケースを指していると言って間違いはないだろう。

二

「醒二十八」の話に戻ると、さらに一つの疑問が浮かび上がる。「前縁・天縁」のある恋愛と無いものとの区別はどこにあるのか。言い換えれば、男女が夫婦になるのが「前縁・天縁」によるものであるということをどうやって読者に納得してもらえるのか、ということである。この疑問に答えるため、「醒二十八」の正文と、その原作とされている『名媛詩帰』[4]「呉氏女」（『情史』[5]巻三「江情」もほぼ同じ内容）との比較を行いたい。

ストーリーの主要部分をみると、「醒二十八」と『名媛詩帰』「呉氏女」とはほぼ一致している。いずれの作品においても、天候の変動という偶然は、ストーリーの展開をおし進めるうえで、大きな役割を果たしているのである。まず、二人が出会うのは、それぞれの乗っていた船が狂風を避けるため、同じ場所に泊まっていたからであった。さらに、ちょうど二人が密会して交わった夜に狂風が止んだため、船が再びそれぞれの目的地へ出発してしまい、男性は自分の船に戻ることができなくなった。つまり、二人の恋愛において、「狂風」という要素は極めて重要な役割を演じているのである。だが、二作を比べると、「呉氏女」では、偶然を強調する文字が一箇所も見られないのに対し、「醒二十八」では天候の急変が何かの暗示であるかのように語られている。例えば、

「（呉君）秩滿還朝。候風於淮安之版閘」（呉君は地方の任期が満了して朝廷に戻るとき、淮安の版閘（水門）で風が止むのを待っていた）（「呉氏女」）

「呉府尹船上正揚著滿帆、中流穩度。倏忽之間、狂風陡作、怒濤洶湧、險些兒掀翻」（呉府尹の船は帆をいっぱいに張っており、江の中流も穏やかであった。そのとき突然、狂風が吹き起こり、怒涛が船を飲み込まんばかりに荒れ狂い、襲いかかってきた）（「醒二十八」）

「呉氏女」では激しい「風」もどこにでもある現象として理解されるが、「醒二十八」ではあたかもこれから何か尋常でないことが起こるかのように、読者に不思議さを感じさせずにはおかない。

「狂風」の描写のほかにも、さらに以下の二つの改変にも注目すべきであろう。

（1）男女双方の家柄のつながり

原作では、男女双方の家族は全く関係ない赤の他人だった。ところが、改作の手を経て、両方の父親は昔京で付き

合いのあった仲へと変わった。それによって、突然の狂風に加え、昔の知り合いが思いかけず出会ったという偶然が重なり、物語は滅多にない特別な出来事という印象を強めた。

（2）事前の夢

「醒二十八」で大胆に密会の約束をする前の夜、二人は同じ夢を見るのだが、その夢の内容は翌日に起こることとほぼ同様であった、という原作に全く見られないプロットが加えられた。

「狂風」についての加工と合わせて、この三つの改変のいずれからも、主人公らの恋愛物語に不思議さと神秘さを強めようとする作者の動機が窺えるのである。作者はこういった改変を通じて、主人公二人が結ばれるのは人知を越えた不思議な力が働いた結果であり、それはほかならぬ「縁」というものであるという思想を読者に納得させようとしているのだと考えられる。たしかに、入話にも夢のお告げという要素はあるものの、それは科挙の結果についてであって、二人の「姻縁」を示すものではなかった。このため、入話の二人が結ばれなかったことは当然のこととして受け入れられたのであろう。

なお、『情史』「江情」の最後には、

「若是一偷而去。各自開船。太平無話。二人良縁終阻。行止俱虧。風便舟開。天所以成美事也」（もし二人が一回密会しただけでまたそれぞれの船で出発したならば、話にはならない。その「良縁」も結局は叶わず、双方の行為も不正なものになってしまう。幸い風が止み、二人が同じ船に乗ったまま船が出発した。それは天が彼らの縁談をまとめたということだ）

という馮夢龍の評語がある。この評語に表れる馮氏の恋愛に関する見方は、前に述べた「醒二十八」のものとほぼ

一致していることは明らかである。つまり、「縁」を欠く場合は、ひそかに情を通じることは不正な行為である（傍線部）。だが、もしそれが天の意志によるものであれば、美談になるのである（二重傍線部）。「醒二十八」は馮夢龍以外の明代文人により改作されたものとされているが、[6] 恋愛の縁に関する認識の一致から考えれば、馮夢龍が本篇を『醒世恒言』に収める際に、編集者として、自らの見方を作品の中に盛り込んだ可能性も否定できないだろう。もちろん、ただ自分の賛同する思想を反映する作品を収めただけという可能性もある。

ここでもう一つ似たようなストーリーを見てみよう。『古今小説』巻二十三「張舜美灯宵得麗女」（以下は「古二十三」と略す）の正文のあらすじは以下の通り。

郷試に落第した張舜美はそのまま杭州の旅館に逗留していた。元宵節の前夜、劉素香という美女に出会い、お互いに心を惹かれた。翌日、二人は密会して交わり、二度と会えなくなることを恐れて、駆け落ちをはかった。しかし鎮江へ向かう途中、不意にはぐれてしまった。鎮江に着いた劉素香は大慈庵の尼に助けられ、そこでお経を読み仏に祈る日々を送っていた。三年後、張舜美は郷試に解元で及第し、会試に応ずるために上京する途中、鎮江で狂風に遇い、船がしばらく泊まることになった。そこでたまたま大慈庵を訪れたところ、劉素香と再会できた。その後、張舜美は進士に及第し、劉素香と正式に結婚した。のち、天官侍郎に至り、子孫も繁栄した。

やはり「才子佳人」の「私諧歓好」の話であるが、その結末は「醒二十八」の正文と類似し、入話とは異なっている。以上述べたような編集者の意識を考えれば、この二人にも結婚する「縁」があるに違いない。その「縁」はどのように表現されているのだろうか。ここで、いくつか注目されるディテールをあげる。

（1）大慈庵の尼は、張舜美とはぐれて一人で鎮江に着いた劉素香に出会った時、「老身在施主家、渡江歸遅、天遣

到此亭中與娘子相遇、真是前縁」（私はお施主の家にいたのですが、江を渡って帰ってくるのが遅れてしまいました。天が私をこの亭に遣わしてあなたと会わせたのです。本当に前世の縁というものです）と言った。

（2）張舜美は上京の途中、鎮江に至り、長江を渡ろうとしたところ、突然狂風が吹き荒れたため、船を岸につけてしばらく待っていたが、その風は数日間止まず、やむなくそこに停泊するしかなかった。（「忽狂風大作。移舟傍岸、少待風息。其風數日不止、只得停泊在彼」）

（3）劉素香は大慈庵で三年間過ごしていたが、張舜美がそこを訪れる前夜、夢の中に白衣大士が現われ、あなたの夫は明日来るのだと教えてくれた。（「忽夢白衣大士報云、爾夫明日來也」）

（4）張舜美がたまたま大慈庵を訪れたところ、「也是天使其然」（あたかも天がそうさせたように）、劉素香はたまたま窓の外を見ており、舜美が目に入った。

こういったディテールを通じて、偶然の出来事を多く積み重ね、ストーリーの不思議さと神秘さを強めようとする書き方は、先に分析した「醒二十八」と同様のものと見てよかろう。

三

先に比較を行った「醒二十八・呉衙内」と『名媛詩帰』「呉氏女」との一組では、結婚を宿縁とする思想を反映したエピソードや場面は、そのほとんどが改作によって付け加えられたものであり、原作には見られないのである。『名媛詩帰』「呉氏女」が狂風による出会いを描いているのは、「醒二十八」のように宿縁思想を強調するためというよりは、むしろ単に偶然の面白さを語るという趣旨のためであると言えよう。

ここではもう一組の例を挙げたい。『警世通言』巻二十三「楽小舍拚生覓偶」（以下は「警二十三」と略す）とその本事である『情史』巻七「楽和」に共通するあらすじは以下の通りである。

南宋のとき、臨安の親戚の家に寄留していた楽和と隣家の喜順娘とは幼馴染であり、周りの人々に「天縁」だとからかわれていて、当人たちもその気になっていた。十二歳のときに楽和は順娘と別れ、家に戻った。のち二人は成人して愛し合うようになったが、結ばれぬまま歳月が過ぎた。楽和が結婚の実現を潮王廟に祈ると、吉兆があった。そののち八月十八日銭塘江の海嘯見物の際、予想外の高潮に襲われ、順娘が波にさらわれた。それを目撃した楽和は、泳ぎができないにもかかわらず救出に向かい、やがて二人とも海上に浮上して、救助された。双方の親は二人の心中を知り、すぐに結婚させた。

先に述べた「醒二十八」が「名媛詩帰・呉氏女」を改作したように、『情史』「楽和」が「警二十三」に改作された際にも、婚姻を宿縁とする思想を強調するために、いくつかの点に工夫を凝らしている。ここでは二点を挙げたい。

（1）両作品とも、楽和が潮王廟で居眠りしているとき、夢の中で順娘は自分の運命の妻であるという占いの結果が出たというシーンがあるが、両者には一つ細かな差異がある。

忽見一老叟。衣冠甚古。手握團扇。上寫姻縁二字。（突然一人の翁が見えた。その衣冠は甚だしく古風で、団扇を手にしていた。そこには「姻縁」の二字が書かれてあった。）

――『情史』「楽和」

忽見碑亭内坐一老者、衣冠古樸、容貌清奇、手中執一團扇、上寫姻縁前定四個字。（突然その石碑を収めたあずまやに一人の翁が座っているのが見えた。その衣冠は古風かつ素朴であり、容貌は端正で気品があり、団扇を手にしていた。そこには「姻縁前定」の四字が書かれてあった。）

――「警二十三」

『名媛詩帰』「呉氏女」と異なり、『情史』「楽和」の中には「天縁」という言葉が現れる。また、「姻縁」と書いた団扇を持つ老人が登場する。「潮王」という名前からすれば、潮の神様であるが、ストーリーの中では「月下老人」と同じ役割を果たしているのである。この潮王は、婚姻を決める「縁」の力をキャラクター化した人物と見なしてよいだろう。言い換えれば、抽象的な存在である「縁」がここで具象化して神の形をとったのだと考えられる。

右の引用で傍線を施した二箇所の違いは僅か二文字だが、そこに窺える意識は大きく異なっていると言えよう。「警二十三」には、男女が結ばれるのに不可欠な「縁」が前世で決められるものだと明確に主張されていることになる。この改作によって、「姻縁」に対する認識は、一歩進み、「醒二十八」など「三言」のほかの作品に現れる宿縁の思想と一致するものとなったのである。

（2）順娘を救出するために楽和が海に飛び込んだというシーンにおいて、「警二十三」では新しいディテールを展開させている。それは以下のような部分である。

海に飛び込んだ楽和は、夢の記憶に導かれたかのように海底の潮王廟に至った。そして潮王が以前夢で見た老人であることを知った。そこで潮王から順娘を授けられた。

これは海底での出来事の描写だが、『情史』「楽和」では、二人が入水してから浮上するまでのことについては一言も書かれていない。ただ、二人が奇跡的に蘇生したことについて、「若有神佑焉」（あたかも神の加護があったかのようだ）という感嘆があるのみである。思うに、「警二十三」の作者はそのことばを敷衍して新しいプロットを作ったのではないか。この変化によって、二人の恋には神の加護があるかのようだという、原作の不確実な感覚が、本当に加護があったという事実へと変わったのである。「宿縁」の存在を示す一つの証拠とするための改変であると考えてよかろう。

この二点をあわせて考えれば、「警二十三」の作者は、改作の手を加えた際に、主人公二人の「縁」を明確に前世で定まった宿縁へと書き換えたに止まらず、さらにそのような宿縁の作用を司る人物（潮王という神）をストーリーのクライマックスの部分に再登場させ、宗教的な色彩を読者に色濃く感じさせるようにしたのである。

四

さて、以上に述べた改作による変化は、ここに取り上げた作品のみならず、「三言」に収められる恋愛・婚姻に関する小説と、それらの基づいた文言の作品との間に一般的に発生したものと見なしてもよかろう。言い換えれば、「三言」の多くの恋愛小説が宿している「宿縁」の思想は、それらの基づいた文言の作品においてはまったく見られない。[7] また、奇談という色彩の濃い文言の原作は、ストーリーについて感嘆したり評論したりすることは多いものの、そのストーリーを用いて読者に道理を教えようという態度はほとんど見られない。その反対に、「三言」の恋愛小説では、珍しい話を語っているにもかかわらず、それを一般的な法則の支配の下で生じた現象としてとらえたうえ、さらにそのストーリーを用いて道理を強調し、読者に教えようという傾向が見られる。

こういう傾向の背景には、各篇の作者はもちろん、「三言」全般の編纂者と一部の作品の作者である馮夢龍が意識的に原作を加工したことがあるに違いない。

「三言」の編纂意図、或いは編纂者としての馮夢龍の小説観については、これまでにも多くの研究者が非常に深い関心を寄せ、様々な論著を著している。[8] この問題を検討する際の手がかりとして頻繁に引用される文献資料は、可一居士と署名され、馮夢龍の手になるものと考えられている[9]『醒世恒言』の序文である。

「六經國史而外、凡著述皆小說也。而尚理或病于艱深、修詞或傷於藻繪、則不足以觸里耳而振恒心……明者、取其

可以導愚也。通者、取其可以適俗也。恒則習之而不厭、傳之而可久。三刻殊名、其義一耳……以明言・通言・恒言為六經國史之輔、不亦可乎……」（六経・国史以外の著述は、およそみな小説である。しかし、道理を説くという類の著述の中には、難解という問題を抱えるものがある。言葉使いにこだわるという類の著述の中には、言葉の選択にこだわりすぎて文章の表現を妨げてしまうものもある。そうなると、文章が庶民の耳に触れて恒心を奮い立たせる力は削がれてしまう。……「明」とは、この本を通じて、愚者を導くことができるという意味である。「通」とは、これで世俗に適応することができるという意味である。「恒」とは、読者がこれを何回読んでも厭きず、ずっと人々の間に伝わっていくという意味である。この三つの小説集は、名前はそれぞれ違うものの、それらの意味は一つしかない……『明言』・『通言』・『恒言』は六経・国史の補佐となる書物といってもよいだろう……）

この文章から馮夢龍の、「三言」を用いて民衆を教化しようという意図が窺えるという考えが多くの研究者によって共有されている。例えば小野四平は、馮夢龍は「小説を里耳に触れて恒心を振うに足るもの、つまり民衆の教化に役立つものでなければならぬと考えていた……それぞれ名称をちがえてこそあれ、三言に通ずる義はただ一つであるという。それが、民衆の教化に役立たんとの意図を指すことは明らかである」と述べている。[10] 大木康も「三言」の編纂方法について、従来伝えられてきた話を加工して、あらすじを「勧善懲悪」のモラルで一貫させようとした痕跡が見られると指摘している。[11]

また、『古今小説』の序文においても、馮夢龍は小説の持つ「感人」（人を感動させる）という力を強調し、読者（聞き手）に自らその弱点を改めさせるという作用があると明言した（「怯者勇。淫者貞。薄者敦。頑鈍者汗下」臆病なものは勇敢に、淫なるものは貞節に、軽薄なものは重厚に、頑固で愚かなものには汗を流させる）。[12]

たしかに、「三言」の作品を読むとき、読者はその「説教くさい」面を無視することは出来ない。本論が中心とし

て取り上げる主題について見てみると、不幸に見舞われた夫・妻を見捨てず苦難を共にする夫婦の情義を讃えるもの（「古二十・陳従善梅嶺失渾家」、「醒九・陳多寿生死夫妻」ほか）、いったん夫婦になることを誓った以上、たとえ誘惑或いは困難にあっても必ずそれを実現しようとする行為を宣揚するもの（「警二十四・玉堂春落難逢夫」、「警三十二・杜十娘怒沈百宝箱」、「警三十四・王嬌鸞百年長恨」ほか）などがある。さらに、ほかの主題についても見てみると、友人への義、親への孝、善行を積むこと、道楽者の改心など、道徳を教えるという意図が含まれる作品は少なくない。

以上の二点から、馮夢龍は白話小説を通じて民衆への道徳教育を実施しようという意図を持って「三言」を編纂していたという意見はたしかに筋が通っているようでもある。だが、実際には決してその通りの内容の作品ばかりとは限らないのではないか。男女の恋愛を主題とする作品のなかにも、「色」或いは「淫欲」を戒めるべきことを啓示する内容がある一方で、情交の場を露骨に描写するものも見える（例えば、先に挙げた「古二十三・張舜美灯宵得麗女」）。また、若い男女の自由恋愛をロマンチックに描きつつ、出会ってから早くも二三回目の対面ですぐに情を交わしてしまう主人公らの行為は、現代人の目から見ても軽率に過ぎると感じられる。ましてや儒教論理を正統とする「貞操観」の厳しい時代において、このような描写が民衆の教化によい影響を与えるとは決して見なされなかっただろう。このような描写はむしろ正統的な論理規範に反逆して、人々の心を儒教の束縛から解放させようとしているとも読める。大木康はさきの論に続いて、馮夢龍には民衆の教化のほかに、もう一つ重要な編集方針があり、登場人物の真率な心情に根ざした純粋な行動であるか否かという基準が設けられている、と指摘している[13]。

教化と真情の描写という二点に加え、本論はさらに一つの側面から「三言」の編纂意図を考えてみたい。紙幅の都合上「三言」のあらゆる主題の作品を取り上げ、全面的に論証することはできないが、恋愛・婚姻を主題とする作品を中心に、ほかの主題の作品にも少し触れながら検討を試みることにする。

前述のように、「三言」の恋愛小説中の結婚を宿縁とする思想が読みとれる描写は、そのほとんどがもとの文言小説の中にはなく、改作を施される際に作られたと思われるものである。このことから、改作の筆を加えた作者らは、意識的に宿縁の思想を小説に盛り込んだのではないか、「三言」の編纂者であると同時に一部の作品の作者でもある馮夢龍はそれらの恋愛小説を通じて、読者に宿縁の思想を教えようとする意図があったのではないか、と推測したい。

その検証に入る前に、この推論は先に述べた「教化説」と重なり合うところがあり、切り離して考えることは出来ないということを述べておかなければならない。宿縁という意識は宿命論の中の婚姻に関する思想であり、言い換えれば、それは宿命的な人生観ないし世界観の、婚姻という一面における反映に過ぎないからである。いうまでもなく、小説が宿しているこのような思想は、佛教を主とした宗教思想の影響を受けて生じたものだろう。そして、そもそも宗教は人々に善い行いを勧め、導く性質を持っているのである。こういう意味で、宿縁の思想を教えることは「教化説」と密接に関わると言ってよい。しかしながら、宗教の力を借りて民衆に善い行いを勧めることと、六経・国史などの輔助として儒教の論理・道徳を民衆に教えるということの間には異なる特徴が存在すると思われる。

検証を行うにあたって、まずは「醒二十八・呉衙内」の入話と正文に見える異同を再び取り上げる。第一節で分析したように、両者の構成はたくさんの共通点を持ち、類似性の極めて高いストーリーになっている。にもかかわらず、それらの結末は正反対といえる二つの方向に進んでいる。このことについて作者（語り手）は、恋人が最後に結婚できるかどうかは、二人の間に宿縁があるか否かによって決まるのだと説明している。さきにも触れたように、儒教の教えによれば、男女の結婚は所謂「父母の命、媒酌の言」によるものでなければ成立できないものである。よってこの作品は、儒教の規範に反逆し、当時では正統派には許されぬ「自由恋愛」を提唱していると見るほうが作者の本意に近いはずだ。「自由恋愛」を提唱しているといえば、大木の「真情説」に当たることになるが、それは正文のみに限られ、入話のほうには適用しがたい。入話も正文と同様に、主人公らが自らの感情にしたがって愛し合うよう

になり、密会して情を交わしているのだ。いずれも同じく真率な心情に根ざした純粋な行動であるが、入話の二人には五百年前に決められた縁がないということだけで、結婚に至らず、さらに男性は状元になれる運命まで奪われてしまった。入話が強調しているのは明らかに、結婚は宿縁によって決められるものだということであろう。一方、正文の二人は最後に円満な夫婦になるとはいえ、最初に軽率に交わっていることについては疑問を抱かれてしまう恐れがあるかもしれないが、宿縁を強調することによって、軽率な情交にも合理性を与え、作品を読み進めていくにつれて疑問も次第に解消される、と作者は考えていたのではないかと思われる。

要するに、男女双方が「真情」を持っていても、必ずしも作者の賛同を得、円満な結末を迎えるように書かれるとは限らない。このように恋愛が成就するか否かにおいては、第一位に重視されるのは「宿縁」であり、「真情」は次位におかれている、ということなのである。

このように、類似した筋を持ちながら、逆方向へ展開していく例はほかにもいくつか存在する。

「古二十四・楊思温燕山逢故人」、「古二十七・金玉奴棒打薄情郎」、「警三十二・杜十娘怒沈百宝箱」は、いずれも男性が誓いを破って妻あるいは婚約者を裏切る話である。以下にそれぞれのあらすじを示す。

靖康年間、宋の講和使節として燕京を訪れた韓思厚は、義兄弟の楊思温を通じて、靖康の乱の際に金国に捕らえられ、操を守るため自刎した妻鄭意娘の亡霊と再会することが出来た。思厚は再婚しないことを誓い、亡妻の同意を得て遺骨を国へ持ちかえり葬った。しかし、のちに思厚は、夫を亡くして出家した道観の観主の劉金壇に一目ぼれして、意娘との誓いを破って再婚した。新婚生活が意娘の霊魂に邪魔されたため、思厚は意娘の遺骨を墓から掘り出し、揚子江の中に捨ててしまった。最後に、再婚した二人はそれぞれの亡妻・亡夫の霊魂によって揚子江に引きずり込まれて死んだ。（「楊思温燕山逢故人」）

宋の紹興年間、一人娘の玉奴を士人に嫁がせようと望んでいた金老大という乞食の親分がいた。太学生の莫稽は、両親が死んだため生活に困っていたので、玉奴が下賤な出身であることを嫌がりながらも彼女と結婚した。金家の惜しみない援助を得て、莫稽は三年後に科挙に及第し、無為軍司戸に任じられた。赴任する途中のある夜、依然として玉奴の出身を忌まわしく思っていた莫稽は、彼女を船中から突き落とし、そのまま赴任した。玉奴はあとから通りかかった、淮西転運司に赴任する許徳厚の船に救われ、彼の養女となった。莫稽の上司にあたる許徳厚が、自分の養女を莫稽に嫁がせようと言ったため、莫稽は喜んで受け入れた。結婚の夜、莫稽は新婦が玉奴であることに驚き、そのうえ玉奴らに棒でさんざんに殴られてしまった。その後、莫稽は誤りを改め、夫婦は睦みあって円満な生活を送った。（「金玉奴棒打薄情郎」）

明の万歴年間、太学生李甲は名妓杜十娘と相愛の仲になり、夫婦になることを誓った。十娘は自分の金を李甲に与えて自分を落籍させた。二人は結婚の許しを得るため、李甲の家に向かった。たまたま瓜州で風雪のため停泊しているときに、孫富という商人の息子が十娘の美貌に惹かれ、十娘を譲るよう李甲を口説いた。妓女のために金を失い、さらに妓女を家まで連れて行くことで父の怒りを買ってしまうであろうと恐れていた李甲は、孫富に説得され、千両の銀で十娘を譲渡することに同意した。このことを知った十娘は、持ってきた巨額の金銀財宝を川の中に投げ捨てると、孫富と李甲を罵り、自ら身を川の中に投じた。のちに、李甲は十娘のことを悔やんで病になり、生涯癒えることはなかった。（「杜十娘怒沈百宝箱」）

「三言」の恋愛小説の中では、主人公らの行為に賛同する立場を読者に強く示すためか、文言の原作の結末を非現実的なほどに円満に書き換えたケースが多くを占めている。一方、上にあげたように、悪いことをしたものが懲罰を

科される例も少なくない。そのような意味では、「三言」は「勧善懲悪」という性格を持っているということも否定できないだろう。しかし、以上の三つの「負心男子」の話を比べてみると、「勧善懲悪」の性格と合致しているとは言えないところに気づく。試みに、三人の男性の行った、妻・婚約者を傷つける行為と、彼らの受けた懲罰を、以下の表に示す。

作品	悪質な行為	最後の懲罰
「楊思温」	意娘との誓いを破って再婚した。さらに、その遺骨を墓から掘り出して揚子江の中に捨てた。	意娘の霊魂に揚子江に引きずり込まれて死んだ。
「金玉奴」	妻玉奴の家から貰った援助のおかげで及第したのに、彼女の出身を忌まわしく思っていたため、殺そうとして船中から突き落とした。	上司の養女と結婚することになったが、新婚の夜、新婦が玉奴であることに驚き、さらに玉奴らに棒でさんざん殴られた。
「杜十娘」	夫婦になることを誓っていたのに、結局は父に怒られることを恐れて、千両の銀で杜十娘を他人に売った。	わずか千両の銀で、計り知れない財宝を持っていた杜十娘を売ってしまい、ついに彼女を死なせたことを後悔して、生涯病を抱えることになった。

どう考えても、この三つの作品の中では、かつて受けた恩を忘れ、妻を殺そうとした「金玉奴」の莫稽の行為が最も悪質なのではないか。しかしながら、彼は結局ただ殴られるという懲罰を与えられたにすぎず、「懲悪」というには少しふさわしくないと思わざるを得ない。一方、現代の視点から見れば罪の最も軽い「楊思温」の韓思厚は、逆に

最も悲惨な末路をたどっている。

ところが、「楊思温」を、その原作とされている『夷堅丁志』巻九「太原意娘」と比べてみると、大きく改変されていることがわかる。「太原意娘」では、思厚が再婚したことについて「後数年。韓無以為家。竟有所娶。而于故妻墓稍益疏」（数年後、韓は家族がなかったためついに再婚して、亡くなった妻の墓にもあまり行かなくなった）と述べているのみである。ところが、「楊思温」では、先に掲げたあらすじのとおり、意娘の霊魂との誓いを裏切って再婚しただけでなく、さらに意娘の遺骨を墓から掘り出して揚子江の中に捨てるという、憎むべき行為までが描かれている。また、結末についても、文言では韓思厚が夢で亡妻の霊魂に責められたため、恥じ入って病気になって死んだとされていたものを、白話では意娘の霊魂に揚子江に引きずり込まれて死んだと書き換えている。このような改作によって、「太原意娘」の読者にとっては喚起されにくい怒りや恨みという感情が、「楊思温」の読者にとっては、ストーリーの流れとともに自然に喚起されるようになったと言えよう。この変化は、それぞれの作者が作品を通じて読者に伝えたいものが異なるために生じたものと思われる。忘恩の男性を懲罰することで読者に何かを教えようとする「楊思温」と異なり、「太原意娘」にはそのような意図はほとんど見られず、むしろ逆に作者には主人公夫婦の境遇に同情する傾向があるのではないかと考えられる。意娘と夫は宋金戦争で死に別れてしまったのだが、実は『夷堅志』の編纂者洪邁本人も、戦争で家族と離散した経験がある。彼の幼いころ、父親洪皓は金国に拘留され、長期に渡って家族と音信が途絶え、後には洪邁自身も宋の使節として金国に渡った際にいったん軟禁された。劉勇強は、この作品に含まれる感情について、洪邁には身にしみる痛みがあったため、戦争で一家離散した人々に対して無限の同情を作品の中に注いだのだと指摘した[14]。同情の気持ちを込めて、乱世に生きる人間の不幸な運命を描き出すことが、洪邁の本意であったといえよう。

以上「太原意娘」との比較によって、「楊思温」の最後に見える韓思厚の悲惨な末路は、原作に手を加えた結果で

あるとわかった。次にこれを、「金玉奴」における忘恩の男性に対する処置方法と比べてみよう。亡妻の遺骨を江の中に捨てた男性が、妻の霊魂に江に引きずり込まれて死ぬという懲罰を科されるのに対し、妻の命を奪おうと江の中に突き落とした男性の受けた懲罰はただ殴られるだけであり、のちにいっそう円満な夫婦になるというよい結果を得た。これらの現象から、悪い行為或いは悪い人間に対し、懲罰を科する基準についていったいどう考えればよかろうか。ここでは、人間を裏切ったり傷つけたりしたとしても、なお救いの可能性が残る（「金玉奴」の場合）ものの、霊魂に対して同じようなことをしてしまえば許されることはない（「楊思温」の場合）、ということが見える。ここから想像されるのは、悪い行為の程度のみで懲罰の重さが決定するのではなく、更にその行為が霊魂・天意などの超自然的な存在に許されるのか否かということが基準となっているのではないかということである。霊魂を冒して命を奪われる韓思厚とはちょうど反対に、莫稽は金玉奴を江の中に突き落としたが、彼女は奇跡的に生き残った。それはまさにいわゆる「天意」というものだろう。このように考えると、なぜ韓思厚と莫稽に与えられた懲罰に天と地の差があるのかが明らかになるのではないか。要するに、金玉奴を殺そうとしたとはいえ、彼女は天意によって救われていたために、莫稽の犯した罪も軽くなったということなのだ。

さきに「三言」の恋愛小説には読者に宿縁の思想を教えようとする意図があると述べたが、考察の範囲を推し広げると、実は恋愛の主題に限らず、ほかの主題の小説においても宿命の思想がよく表れていることがわかる。例えば以下のような例をあげることができる。

「萬般皆是命，半點不由人。」（あらゆることはみな命により決まっているもので、少しも人の自由にはならない）（「警十七・鈍秀才一朝交泰」）

「命裡有時終自有，人生何必苦埋怨。」（運命で定まったものならばいつか必ず来る、なぜ人生で不平不満を言う必要があろうか。）（「古十八・楊国老越国奇逢」）

また「三言」には、「楊思温」のほかにも、霊魂の登場する話がよく見られる。妓女廿二娘の霊魂が薄情者に復讐する「警三十四・王嬌鸞百年長恨」の入話、愛愛という少女が、死んだ後も愛慕する男性といったんは結ばれる「警三十・金明池呉清逢愛愛」などがその例である。これらの作品に見られる「霊魂の復讐」或いは「霊魂の力」は宿命の思想とはもちろん別物ではあるものの、神秘的な力の存在を認め、そしてそれを畏敬するという点においては共通すると言えるだろう。そのほか、「三言」の中では、佛教・道教に関する主題も重要なものであり、かなりの量を占めている。それらをあわせてみると、宿命思想を含め、神秘的で宗教的な色彩の濃厚な意識（いわゆる迷信）を表現することは、「三言」の一つの重要な性格であるといえよう。では、こういう性格からはどのような編纂意図が窺えるのか。

宿命にせよ、超自然的な存在にせよ、これらを重んじる意識は、結局人間が未知の現象に対し、自分の持っている考え方を強引にあてはめ、解釈した結果、生じたものと考えられる。その後、このような意識は一部の人々（具体的に言うならば統治階層）に利用され、まとめられて教条となり、守るべきものとして一般民衆に教えられる。人間は未知の物事に恐怖感を持ち、畏敬する傾向があるため、民衆に純粋に道徳を教えるというよりも、彼らの畏敬するものを利用して社会的な行動規範を遵守させ、生活の現状に安んじさせる方法のほうが効果的であったためであろう。また、必然的な関係のない物事を結びつけて世間の一般法則とし、おとなしく一生を終えるよう教える言葉もある。例えば以下のようなものがそうである。

「不貪花酒不貪財，一世無災無害。」（妓楼の酒におぼれず金銭を欲張らなければ、一生災害に見舞われることはない。）（「警三十四・王嬌鸞百年長恨」）

「有福之人人伏侍，無福之人伏侍人。」（福のある人には人が仕える、福のない人は人に仕える。）（「古十八・楊国老越国奇逢」）

以上述べたように、「三言」の作品の中に表れている思想から、正統的な道徳を教えて儒教を擁護しようとする面、当時起こっていた人間性を解放しようする思想潮流に応じて男女の真情による自由恋愛を讃える面、宿縁・宿命・天人感応（人の至誠が天を動かす）・因果報応などの迷信を通じ、民衆に分に安んじて己を守るように教える面などが、「三言」のなかには複雑にからみあって存在していることがわかるのである。

五

ここまで、具体的な作品をとりあげ、そこに表れる思想を考察することによって、「三言」の中には、馮夢龍が『醒世恒言』の序言において掲げていたような「六経・国史の補佐」となるという効用とは相違するものが多分に含まれていることがわかった。それらの作品は、必ずしも民衆の教化に役立てようとしているとは考えられず、個別の作品の創作意図、或いは「三言」全体の編纂意図は、必ずしも「里耳に触れて恒心を振う」ことにあったとは思われない。それでは、なぜ馮夢龍は事実と合致しないことを序文に書いたのだろうか。ここでは、二つの方面からこの問題を考察したい。

まずは、中国文学史における小説及び白話小説の地位から考える。さきに触れた『醒世恒言』の序文の冒頭で、馮夢龍は「六経・国史の外、凡そ著述はみな小説なり」と述べ、六経国史以外のすべての論著を小説と見なしている。さらに、

「自昔濁亂之世、謂之天醉。天不自醉人醉之、則天不自醒人醒之。以醒天之權與人、而以醒人之權與言。言恒而人恒、人恒而天亦得其恒。」昔から、濁り乱れた世を「天醉」と言う。天は自ら醉わず、人が天を醉わすのであるから、天は自ら醒めず、人が天を醒ますしかない。天を醒ます力は人にあり、人を醒ます力は著述にある。著述が「恒」と

いう安定した状態にあるならば、人も「恒」となり。人が「恒」ならば、天もまたその「恒」を得られるであろう。[15]）と続けている。この文章のなかで馮夢龍は、小説を乱世の人々を目覚めさせる「恒言」と位置づけている。これについて小野四平は、六経国史の及び得ない部分、むしろそれまで放置されていた社会の底辺――民衆の生活に対して、馮夢龍は目を向けた、と指摘した。[16] 要するに、小説は儒教経典を補佐する書籍であり、乱世においては人々の心を覚醒させるというきわめて重要な役目を担っていることを、馮夢龍は強調しているのである。

しかしながら、実際には中国文学史において小説は決して馮夢龍の述べたように高く評価されてはいなかった。むしろその逆であったのである。吉川幸次郎は中国小説の地位について、「過去の中国の小説はいずれの階級からも積極的な支持を得がたい存在であった」と判断を下した。その原因として、風教上、治安上の危惧を指摘したうえで、さらに過去の史実を徹底的に追求する中国社会にあっては、「架空の記載は、架空なるが故に、すなわち非論理である」、「この国の古代文明には、ギリシャやインドのそれのように、空想の所産である虚構の言語を尊重する習慣はなかった」と述べた。[17]

小説はまた文言と白話との二つのジャンルに分かれる。では、両者の文学史上の地位は異なっていたのだろうか。小野四平によれば、明代にはすでに文言小説と白話小説とを区別する意識が出現しており、一般の明人の小説観はおおよそ文言の作品、特に唐代の伝奇小説の価値を認める一方、白話小説に対しては極めて少数の例外（『水滸伝』など）を除いて低く評価していたという。[18]

要するに、過去の中国文学史において小説は低く位置づけられており、中でも白話小説はいっそう軽視されていたのである。明末に至って上層の知識人たちが『西遊記』などの白話小説に関心を示した例が現われてきた、ということが磯部彰によって指摘されたものの、[19] 白話小説の読者であることは、士大夫にとって積極的に是認されたことではなかった。吉川幸次郎は、白話小説が士大夫によって大いに読まれ、作者にも多くの士大夫がいたことを指摘し、小

説は「士大夫の間にも、実は滔滔と浸潤していた」としながらも、「しかしそれはあくまでも否認の心情を伴っていた」と述べている。[20] 馮夢龍がさきの序文において小説そのもの及び「三言」という白話小説集をきわめて高く評価したことには、こういった文学史の背景があったことがわかる。白話小説、戯曲そして民歌などの通俗文学という分野に力を尽くしていた馮夢龍は、もちろん当時の一般の人より白話小説という文体の価値を高く認めていただろう。だが、それにしても、六経・国史の補佐、万世太平の源というほど高く位置づけたのは本心によるものだとは考えがたい。本節の冒頭に述べたように、『醒世恒言』の序文で述べられている、民衆を教化して社会をよい方向へ導きたいという目的は、「三言」の編纂意図のひとつに過ぎないと思われる。その一方、個別の作品の中に、とりわけ先行する文言作品との比較から読みとれる、真情を提唱することと迷信を教えることという二つの意図は、序文の中には見えない。「真情」と「迷信」に序文で言及しないのは、おそらくこの二点が「三言」の文学的な地位を高めるという目的を害することを恐れたためで、あえて儒教の教えに符合する「民衆への教化」という点だけを誇張して述べ、「三言」は儒教経典と同列だと主張したのではないかと考えられる。馮夢龍が『古今小説』の序文で「民衆の耳目を益するものを選んだ」と強調していたことについて、尾上兼英が、これは「馮夢龍の編集方針を示すものと見てよい」としながらも、「小説などに手を出すことに抵抗感を感じる士人の弁解と見られないことはない」、「宋元伝来の作品には、妖怪や盗賊の話、幽霊の復讐など雑多な話があり、すべてが教化一色というわけではない」と指摘していたのである。[21]

また、文言で記されてきたそれまでのあらゆる文体と比べ、白話小説には一つ重要な性質の変化が生じていることにも注目すべきである。市井の講談者が語る物語のテキストから、発展変化して生まれたとされる白話小説は、それまで主に士人階層の間でやりとりされてきた詩文などのいわゆる「貴族文学」と異なり、純粋な娯楽を目的とした作品であり、はじめて誕生した商品としての作品でもあった。したがって、創作の意図と、作品の想定する読者との二

つの点において、過去の文学作品と根本的に異なっているといってよい。それまでの文学作品には、功利的な意図がまったく含まれていないとは言えないが、少なくとも詩集・文集・小説集を出版することで儲けようという意図はほとんどなかったといってよいだろう。それゆえ、文言の詩文などの序言は作者の観念及び主張の産物と見なして考察することが出来るが、商品である白話小説集の場合は、その序文を同じように扱ってよいものだろうか。今日の状況を考えれば明らかなように、商品を紹介するためのキャッチフレーズは必ずしも実際と一致しているわけではない。むしろ誇張したり美化したりするほうが一般的であるといえよう。商品である出版物の序文を作成するにあたって、馮夢龍はもはや士大夫たる一面にはいなかったと思われる。戸倉英美が指摘したように、「醒三・売油郎独占花魁」のような読者を励まし導く作品を作る士人という一面のほかに、馮夢龍は、「商業出版物の卓越したエディター兼ライター」という「もう一つの顔」を持っていた。[22] ここで、さらに大木康『明末江南の出版文化』[23]に記されている明代文人沈徳符の『万暦野獲編』巻二十五「金瓶梅」の記述を参考にしたい。

「吳友馮猶龍見之驚喜，慫恿書坊，以重價購刻，馬仲良時榷吳關，亦勸予應梓人之求，可以療饑。予曰：「此等書必遂有人板行。但一刻則家傳戸到，壞人心術，他日閻羅究詰始禍，何辭置對？吾豈以刀錐博泥犂哉！」仲良大以為然，遂固篋之。」（馮夢龍がこれ（『金瓶梅』の全巻を指す）を見て驚喜し、高い値段で買い取って出版するよう書坊に勧めてくれた。その当時、馬仲良（之駿）が蘇州の関所の役人をしており、やはり書店の勧めに応じて世の人の渇をいやすようにと勧めてくれた。だがわたしは、「こうした書物は、きっと誰かが出版する。そして一旦誰かが印刷すれば、家々に伝わり、人の心を悪くすることになる。後日閻魔様が、その災いのはじまりを追求するようなことがあったら、どう答えたらよいかわからない。わたしはわずかな利益のために地獄に落ちてはたまらないからね」といったところ、仲良はなるほどその通りだといって、そのまま篋底に秘めてしまった。[24]）

ここでは、沈徳符が民衆の教化を害することを恐れて『金瓶梅』を書坊に売却する誘いを断ったと記されている。このときの馮夢龍の態度は、沈徳符の態度のちょうど反対であったように見える。馮夢龍は、わずかな利益のために人の心を悪くするという恐れを顧みることなく、『金瓶梅』を出版させようと積極的に勧めていた。もちろん、馮夢龍がそれを勧めたのは、『金瓶梅』が売れることを想定して利益を狙っていたためだけとは限らない。多くの小説読者の需要を満たすため、或いは作品の文学的価値を極めて高く評価していたためだった可能性も十分にあると思われる。しかしながら、『醒世恒言』の序言に見たような「教化」の効能に対する極めて高い関心は、この件においては示されてない。仮に沈徳符の考え方が正しいものだとすれば、むしろ馮夢龍は自分がその序文で提唱した民衆教化の効用とは正反対の方向に、小説の編纂と出版を実践しているようにも見える。実際に、前節で述べたように、「三言」には、「淫」などの非道徳ないし反道徳の内容を描く部分が存在するのでる。

以上に述べたことから、馮夢龍が『醒世恒言』の序言に表した意志はまったく本物ではないとはいえないが、「三言」編纂の際には馮夢龍の商業的な意図と手法も大きく作用していたのではないと思われる。

「三言」の序文に対しては、もう一つ興味深い問題がある。序文に表されている意志は、いったい誰に示すために書かれたのだろうかということである。『醒世恒言』に付けられる文章である以上、いうまでもなく、それを読む読者に見せるものには違いない。とはいえ、その読者の中にもまたさまざまな階層の人が含まれるのだ。明末白話小説の読者について、大木康は、その大きな部分は「生員」を中心とした科挙受験生が占めるが、ほかにも上層階級の士大夫、識字者と考えられる僧侶や道士、また一部の商人と女性がいたと述べている。[25] では、馮夢龍があえて小説を極めて高い地位に置き、「三言」の社会教化の役割を甚だしく拡大したこの序文は、以上のうちどの階層の読者を狙ったものだったのだろうか。それぞれの階層に属する人の性格を考えてみると、六経国史などの書物を経典として尊崇し、社会教化に強い関心を持ち、「万世太平」などの大志を抱くといった性質を持つのは、「生員」を中心とした科挙

受験生つまり文人であり、彼らこそが序文の主張の対象だったのではないか。序文の主張は、尾上兼英が指摘したように、小説の執筆や編纂に手を出す士人にとっての弁解であると同時に、小説を読むことに抵抗を感じる士人にとっても、言い訳となったのではないかと考えられるのである。

本論はここまで、「三言」に見える、先行する文言小説を改作した例を取り上げてきたが、注目される改変は、そのほとんどが庶民のために行われたと思われるものであった。その理由のひとつは、本論が恋愛・婚姻に関する作品を主として考察したことにあるが、ほかにも二つの要因が考えられる。

まずは、それまでおおむね文言のみに注目してきた文人が、はじめて白話小説の世界に入るのは、この文体の基本的な性格が既に定着した後のことだったという事情があげられる。そのため、白話小説の創作（特に文言からの改作）の際に、庶民の興味や好みを満たすよう書かれることが多いのも自然なことであるといえよう。例えば、「醒二十八・呉衙内」の主人公はとんでもない大食と描かれ、その才子のイメージとは相反する要素が加えられているが、これはどう見ても、士人の趣味にあっていたとは考えがたい。

もう一つの理由は、さきにも触れたように、文人にとって、白話小説はただの暇つぶしや娯楽のためのものに過ぎず、それを読むという行為は科挙・出仕というまともな生活のうちにあるものではなかったことである。ために、その内容には、経典と一致しなければならないということが求められない。これらの要因から、「三言」の中身は庶民および文人の中の庶民に接近する一面に向けられることが多い一方で、序文は完全に文人の「士大夫」的一面の需要を満たそうとしているように見える、という興味深い現象が想定できるのである。小説の重要性を強調する論述によって、「士大夫」意識を持つ文人の、まともでない書物を読む時の顧慮を解消させようとしていたのかもしれない。あえて今日の例にたとえるならば、受験勉強に迫られる中学生がたまに勉強を放置してゲームをしようとするときに、「これも一種の脳のトレーニングだ」などと言い訳をするのと同類の現象ではないかと思えるのである。

おわりに

以上考察してきたように、文言作品に基づく「三言」の一部の作品は、白話へと改作される際に、ストーリーの背景となる作品の趣旨ないし思想、及び作者の創作意図にも大きな変化が生じている。本論は、紙幅の都合上、「三言」の中から恋愛・婚姻を主題とするもののみを取り上げたが、このような現象は、「三言」のほかの主題の小説にも少なからず共有されているのではないかと考えられる。また、馮夢龍の編纂意図についても、本論では恋愛・婚姻以外の主題から考察を加えることができなかった。今後はさらに他の主題の作品を文言の原作と比較対照することを通じて、「三言」という小説集の性格をより詳しく検討することを課題としたい。

（注）

（1）いわゆる「話本」の概念については諸説があるが、本論は「宋元以来の講釈師の底本」という定義を用いる。

（2）譚正璧『三言二拍資料』（上海古籍出版社　1980年）、小川陽一『三言二拍本事論考集成』（新典社　1981年）などによれば、現在までその先行する作品が発見されていないものは「三言」の中のごく一部に過ぎない。本論における本事源流などについての言及はおおむねこの二作を参考としたものである。

（3）荒木猛「短篇白話小説の展開――「三言」に見られる人生観を中心として」（集刊東洋学37号　1977年）、小野四平『中国近世における短篇白話小説の研究』第三章「短篇白話小説における恋愛」（評論社　1978年）など。だが、これらの分析の多くは「三言」の編纂意図、成立要素または思想などを論証するために用いられるもので、「三言」の作品を先行する文言作品と全面的に比較するものはほとんど見られない。

（4）『名媛詩帰』：『四庫全書存目叢書』集部第339冊　斉魯書社　1995年

（5）『情史』：上海古籍出版社　1992年

（6）佐藤晴彦「『醒世恒言』における馮夢龍の創作――言語的特徴からのアプローチ（Ⅱ）」（神戸外大論叢第43巻第2号　1992年9月）

（7）小野四平は、註3の論考で、宿命論は『搜神記』などの魏晋時代の文言小説にはほとんど見当たらず、唐宋時代以降の小説（文言を含む）の特有の現象であると指摘した。この点について、荒木猛は、同じく註3の論考で、「婚縁」は白話小説に限らず文言小説においても一つのテーマであったと指摘し、『太平広記』巻百五十九・百六十に「定数（婚姻）」の一項がもうけられていることをその論拠とした。本論は、『太平広記』同巻の作品に表れる宿命論の思想と「三言」のものとは差異があると考え、この説を採用しないことにする。『太平広記』同巻との比較は、今後の課題にしたい。

（8）小野四平『中国近世における短篇白話小説の研究』第一章「馮夢龍について」（評論社　1978年）、大木康「馮夢龍「三言」の編纂意図について――特に勧善懲悪の意義をめぐって」（『東方学』69号　1985）、「馮夢龍「三言」の編纂意図について（続）――〝真情〟より見た側面」（『東方学』70号　1985年）、陳大康「「教化為先」伝統的確立」（『通俗小説的歴史軌跡』湖南出版社　1993年）など。

（9）前掲註8小野四平『中国近世における短篇白話小説の研究』第一章「馮夢龍について」に詳しい説明がある。

（10）前掲註8小野四平『中国近世における短篇白話小説の研究』第一章「馮夢龍について」。

（11）前掲註8大木康「馮夢龍「三言」の編纂意図について――特に勧善懲悪の意義をめぐって」。

（12）戸倉英美「「三言」対偶構成の意味」（東京大学中国語中国文学研究室紀要　第2号　1999年）の日本語訳を参照した。

（13）前掲註8大木康「馮夢龍「三言」の編纂意図について（続）――「真情」より見た側面」。

（14）劉勇強「論「三言二拍」対『夷堅志』的継承与改造」（文学遺産　1995年第4期）。

（15）前掲註12戸倉英美「「三言」対偶構成の意味」の日本語訳を参照した。

（16）前掲註8小野四平『中国近世における短篇白話小説の研究』第一章「馮夢龍について」

（17）吉川幸次郎「中国小説の地位」（『中國散文論』所収　筑摩書房　1966年）

（18）前掲註8小野四平『中国近世における短篇白話小説の研究』第一章「馮夢龍について」

（19）磯部彰「明末における『西遊記』の主体的受容層に関する研究――明代「古典的白話小説」の読者層をめぐる問題について――」

（『富山大学人文学部紀要』第12号　1987年）。

（20）前掲註17「中国小説の地位」。

（21）前野直彬編『中国文学史』第七章・小説（東京大学出版会　1975年）。

（22）前掲註12戸倉英美「「三言」対偶構成の意味」。

（23）大木康『明末江南の出版文化』第二章「明末江南における出版業隆盛の背景」（講談社　1995年）。

（24）『万暦野獲編』巻二十五「金瓶梅」。訳は大木康『明末江南の出版文化』（講談社　1995年）によるもの。

（25）大木康「明末における白話小説の作者と読者について――磯部彰氏の所説に寄せて」（明代史研究第12号　1984年）。

使用テキスト

『喩世明言』　許振陽校註。　人民文学出版社1958年に刊行した『古今小説』の1987年再版。前言によれば、このテキストは、内閣文庫蔵明天許斎刻本を底本とし『清平山堂話本』と『古今奇観』を参考にしたもの。

『警世通言』　厳敦易校註　人民文学出版社1956年刊行、1984年再版。前言によると、このテキストは、内閣文庫蔵兼善堂本によった世界文庫本を底本とし三桂堂本を参考にしたもの。

『醒世恒言』　顧学頡校註　人民文学出版社1956年刊行、1987年再版。前言によると、このテキストは、内閣文庫蔵明の葉敬池刻本によった世界文庫本を底本にし衍慶堂本と『古今奇観』を参考にしたもの。